

## ■書評■

濱中 淳子・葛城 浩一編著

『〈学ぶ学生〉の実像：大学教育の条件は何か』（勁草書房）

敬愛大学

武内 清

大学生の学びの実態についての質的的な研究は、これまであまりなされてこなかった。最近の文部科学省の「全国学生調査」（2024 年）でも、大学生の授業出席率、授業外学習時間（「予習・復習・課題など」という学習の量的な側面）に関しては質問しているが、学びの質的な側面は明らかにされていない。その他の大学生調査も同様である。

そのような中で、本書は、高等教育に詳しい専門家 6 人の共同研究の成果で、大学生への半構造化インタビューという方法で、大学生の学びの質的な側面を明らかにしている。

調査の方法は、次のようなものである。選抜の難易度を考慮して 5 大学を選び、その社会科学系の学生 86 名に、詳細なインタビュー調査を実施している。その際に大学での学びと同時に、高校時代の学び、大学入学目的、キャンパスライフ、将来のキャリア展望との関連も聞いている。分析の際、学生の所属大学をエリート大学、中堅大学、ノンエリート大学、放送大学の 4 類型に分けている。

学生の学びの質を考察する際、＜学校教育の枠組みでの学び＞と＜大学固有の学び＞を明確に区別しているのが、本書の最大の特質である。前者は、「知識量の制限があるうえ、正解あるものを扱う」（21 頁）と説明されている。後者は、「正解のない課題について、重層的な根拠を用いながら、自分なりの答えを抽出するというもの」（125 頁）と定義されている。

インタビューした 86 名の学生の学びの多くは、＜学校教育の枠組みでの学び＞と判定されるものが多い。高校時代の受験勉強はもちろん、大学においての単位の為や資格の為の学びは、＜学校教育の枠組みでの学び＞と分類され、「社会科学領域の調べ学習」は根拠の重層性が低く、まだ＜大学固有の学び＞の前段階と判定されている。

正課に多くのエネルギーを注いでいる学生を、各大学類型から 3 名ずつ抽出して、その学びの詳細を記述している。その描写はきわめてリアルで、ドラマを観るように工夫されたものである。その一部を転載しておこう。

「タカオは進学校から N 大学に進学した学生だった。心機一転、N 大学では特別クラスで学び、トップクラスの成績を維持する。そのタカオの学びも、能動的でありながら、席順を意識した特徴をもち、正解のない課題について自ら答えを導きだそうとするものではなかった」（ノンエリート大学）。「モミジは、地域問題に関心をもった状態で大学に進学した。奨学金で学費を賄ったことが学びへの意識を高め、卒論執筆で新たな発見に刺激を受け、知識獲得だけでなく＜学校教育の枠組みを超えた学び＞へ足をいれていた」（中堅大学）。「リョウヘイは、教員の助言の中で国際法や社会問題へ向き合い方を学べる場に自ら身を置くようになり、＜大学固有の学び＞を展開するようになった」（エリート大学）。

抽出され描写された学生 12 名のうち、「大学固有の学び」まで到達したとされる学生は、放送大学生の 1 名とエリート大学生の 1 名だけで、「学校教育の枠組を越えた学び」は 4 名（エリート 1 名、中堅 2 名、放送大学 1 名）、「学校教育」どまりは 6 名（中堅 2 名、ノンエリート 3 名、放送大学 1 名）である。

12 人の学びの物語から＜大学に固有な学び＞を支える条件として編者の濱中氏は 2 点を指摘している。1 つは、「大学へ進学するまでに、＜学校教育の枠組みでの学び＞を十分に経験していること」。もう 1 つは、大学教員による指導で、早い時期からなぜを考えさせる個別指導に近い指導をすること。

このインタビューの考察を補強する補論やコラムも、興味深い内容が掲載され、現代の大学教育や学生の学びで何が大切かを示唆する内容になっている。全体に筆者らの大学観や学生観も伺われ、読み物としても楽しめる。

最後に若干の疑問点を挙げておこう。

1 大学入試が選抜試験から特別入試にシフトする中で、4 種の大学類型（エリート大学、中堅大学、ノンエリート大学、放送大学）を分ける意味はあるのか。

2 ＜学校教育の枠内での学び＞と＜大学特有の学び＞を区別しているが、この 2 つは現在明確に区別できるものなのか。今の高校以下の学校教育でも大学教育と同様に、画一的な答えを求めず、多様な見方を探求するアクティブ・ラーニング（「主体的・対話的で深い学び」）が推奨され、実践されている。

3 全国大学生協調査の大学生に対する量的調査（2024 年）の結果からは、年々「授業（勉強）」重視の学生の増加している。それに対して本インタビュー調査では「正課へのエネルギー」の少ない学生が 8 割以上とされ、量的調査との乖離が大きい。

本書の＜大学特有の学び＞は、「知的コミュニケーション型」（潮木守一）で、＜大学院生特有の学び＞に近いではないのか。

4 多くが青年期を過ごす大学は、モラトリウム、イニシエーションの場としての意味も大きく、授業だけでなく部・サークル活動、友人関係、アルバイト、大学外の知識人から学ぶ機会が多い。「大学生の学びは大学内で完結しない」（解説③）のではないのか。

5 補論②で、アメリカのバークレイ校の学生と教員にインタビューした考察からは、授業を真面目に聞かない学生、予習復習をほとんどしてこない学生、就職優先の学生など、アメリカの大学の「惨状」が報告され、興味深い。

昔評者がアメリカのウィスコンシン大学（UW）の授業や学生の様子を 1 年かけて観察した結果（学生を勉学へ向かわせる小道具は多数あり、学生も勉学に熱心であった）とかなり違っている（「アメリカの教育事情」上智大学教育学論集 30 号、1996 参照）。時代的な変化もあると思うが、個別のケースを一般化するにはさらなる吟味が必要であろう。